

書評

堀誠著『日中比較文学叢考』

中村 佳文

本書は、著者の博士論文「日本の中国文学受容に関する研究」を基礎とし、研究テーマごとに七部に再構成された待望の論文集である。書名に示されるように「比較文学」とはいったい何か。」という問題意識を貫徹して追究する姿勢が具体的な七つのテーマで展開する、重厚感のある論集となっている。序によれば著者の視座の特徴は「材源、受容、影響」といった研究の核となる視点の中で、日本における中国の学問文化の受容相、現在と過去に生じた現実的な現象としての受容の実相に対して深い関心をもつ。」とされ、「いわゆる影響は、ある作家や作品に反応して『影』を作り『響き』を発するものという。その外的な刺激があつてこそその影響でもあり、受容した結果としての発露が問われるものである。」という点に見出せよう。また書名の「叢考」については、「日本と中国の比較文学に関わる個別的な思考を一書に叢集することろにあり、その思考が将来にもわたって連環的に叢生せんことを自ら思念するからである。」とされている。和漢比較文学会において運営はもとより、学問的知見の先導的な役割を担う著者の「比較文学」への視座は、多くの後進の昏き道を照らす光明となると思われる。

更に本書の大きな意義は、「研究の対象や課題は、我々の日常生活の内に息づいている。」という点にも見出せる。それは昨今の社会状況の中で「漢字・漢語・漢文」を学ぶ意義に対して、急速に極端な頹廃へと向かう事象が後を絶たないと思われるからである。高等学校における「漢文」学習の目的・意欲は、概ね入試対策に限定されており、「国語」学習上「日常生活言語」との関連をどこに見出せばよいかを、学習者のみならず現場の指導者が喪いかけている実情への深い危機感を覚える。言語生活や文化的営みを豊かにするためには、「漢字・漢語・漢文」学習を如何に「日常生活」と結びつけるのかという問題意識を、広く教育現場で回復させることが急務な課題であると思われる。こうした意味で、本書の七つのテーマは「日常」や「漢文教材」に通底したものであり、学習者が能動的に活性化した「学び」を創るという意味において、教育現場に大きな示唆を提供するものと考えられる。まずは全七部のテーマを掲げよう。

- 第一部 日中狐変妖婦譚考
- 第二部 菅原道真詩篇考
- 第三部 源平人物故事考
- 第四部 日中秋扇詠歌考
- 第五部 日本『西遊記』受容考
- 第六部 中島敦「山月記」論考
- 第七部 魯迅「故郷」論考

各部に収載された各章の名称までは紙幅の関係で紹介を割愛するが、各二章から四章の論考によって七部にわたるテーマが、奥

深く連環をもつて考察されている。こうした構成を鑑みても著者は、見定めたテーマに対して妥協なく多様な角度から追究するという姿勢を貫いていることが窺い知れる。本稿では著者のこうした姿勢を感得した上で、各テーマの概説的な評は避け、第二部と第六部を中心に筆を進めることにしたい。

第二部は次の四章からなる。

第一章 道真竟宴詠懷人士考

第二章 道真断腸詩篇考

第三章 道真「九月十日」詩篇考

第四章 道真離家落涙鳥雁考

このうち第二章で示される「断腸」は、漢語として人口に膾炙したものであるが、その「材源・受容・影響」を多角的に論じたものは多くはなく、現代ではその語感を見自覚に使用される場合が多いのではないかと思われる。論は、道真の五百余の詩篇に「断腸」の用例が類縁した語を含めて十六あり、中国の著名な詩人などに比べても多いことを指摘することで起筆されている。また中国からの受容を考えたとき、『万葉集』の大伴旅人・山上憶良らの歌の題詞に見られるが『懷風藻』には用例がなく、平安朝の勅撰漢詩文集以後に一般化するもので、和歌における「和語的な受容」も見られないという点からも、道真の用例が日本における受容の上で要となると、問題の所在が明確にされている。その上で道真の用例を時代順に挙げつつ丹念に材源たる中国文学の先例を提示し、「離別詩に典型的な詩句」や「愛児を喪った悲痛を伝える余りある激烈な句作」に使用される漢語としての位置づけを明

確にする。その上で「始謂微微腸、暫続、始め微微として腸暫く続くと謂へりしに」（『菅家文章』一一七「夢阿満」）などの「断」の反意語である「続」を用いた「腸続」の表現は一つの特異なバリエーションであろう。」との指摘。さらには、「時節暗逢流涙氣（時節暗かに涙を流す氣に逢ふ）州名自有断腸声（州名 自ら腸を断つ声有り）」（『菅家文章』一九八「近曾有自京城至州者 誦書一絶云、是越州巨刺史、秋夜夢菅讚州之詞也。予握筆而写。写竟興作、聊製一篇、以慰悲感。」）の用例には、道真の任国「讚州」には、「惨愁」が字音の上で通じ「日本漢字音の同音異義を介した注目すべき言動」と興味深い指摘もなされる。また「白居易に先例の確認される「春腸」の語に触発された道真ゆかりの新造の語」として対となる「秋腸」があるともされ、単なる用例の列挙に留まらず、各語の「材源・受容」を柔軟に辿りながら対象とする作品を精緻に読み込もうとする考察には、新たな見識として学ぶことが多い。

また連続した章展開から語彙的な考察に留まらず、道真の最も著名である流謫後の「九月十日」の解釈を再検討する試みに及ぶ。先行する注釈や中国詩文の用例を批評しつつ、また『大鏡』の記述をも視野に入れながらの考証は実にダイナミックなもので、「比較文学」の具体的な展開を眼前に示されるような迫力を覚える。そして、「断腸」や「腸断」の語が「悲しみや愁いを表すだけでない」ことを確認した上で、「胸が締めつけられるほどの愛らしさ、恋慕の情をかきたてるまでの愛しさ、情愛の切なさ、あるいはそれらによる感動や喜びなどの表現」であるとし、『大鏡』の記述との整合性も述べる。この道真「九月十日」の詩篇や『大

鏡』は、周知のように高等学校教材としても多く教科書に採録されている。現行指導要領から高等学校古典分野で「日本漢詩文」の学習が必須となったことから、教科書脚注や指導書の記述にも、より適切さと文学的深淵を探るがごとき教材研究の知見が求められよう。こうした意味で本書は、教育現場への提言としても大きな意義をもつものと思われる。

次に第六部中島敦「山月記」論考は、次の三章からなる。

第一章 中島敦における「記」と「伝」——「山月記」に向けて——

第二章 月への咆哮——「人虎伝」から「山月記」へ——

第三章 「人虎伝」から「山月記」のテキスト空間を再考する——志怪・伝奇と日本近代の位相——

「山月記」における「人虎伝」との影響関係については既に多くの指摘があるが、双方の文学性について言及しながら類同性のみに留まらず、「山月記」における近代的自我の問題や「咆哮」という語に「東洋的な世界観」を読もうとする姿勢に、本論考の興行きを感じられる。特に第二章における「明月が家人を思うようす」となる中国古典詩歌の発想が底流すること」という点を「日本の漢詩環境」における「山月」を辿りながら導く論の展開には深い興味をそえられる。そこに引用された唐詩は、李白の「静夜思」・白居易「八月十五夜、禁中独直、对月憶元九」・杜甫「月夜」などであり、いずれも高等学校教科書教材として採録率の高い詩となっている。先述した「漢文学習」の目的意識の類廃を考えると、「唐詩」を学ぶことが「山月記」など「現代文」にも「東洋的な世界観」の同線上で通底する視点が与えられることの意義

は大きい。引用された詩は「唐詩」でありながら「日本の漢詩環境」で人口に膾炙したものであり、その「環境」は現代人の日常に直結する「近現代」を考える上でも、見逃せない事象であることを本論考は切々と訴える。結論として「山月記」は、「山月」として出現する明月を介しての、李徴の自己観照の物語とは解し得ないであろうか。」と述べつつ、「故郷」の最後の場面における海辺の砂地の天空にかかった一輪の丸い月の光景に共通するもの」とする指摘も加え、読者に敷衍した視座を与えようとする。

最終的に「異」字が多出する『人虎伝』の世界では『異』の範疇にあり得る事象も、日本の文学的風土ではその「異」を避ける理知の回路が機能しがちなのか。」として「中島は李徴の詩才に鋭敏に反応し、第一流には紙一重な新たな李徴なる詩人像を創出した。」と結論づけ、「志怪・伝奇」と「日本近代文学」との位相を思考する論考として纏められている。

「比較文学」はともすると類同性における「出典」「典拠」の指摘に留まる論考が多々見られる中で、本書は各テーマにおける対象を多角的な視座から掘り下げた考察を展開していることを読後に実感できる一書に仕上がっているといつてよい。また折に触れて述べてきたように、「文学研究」が主に「中等教育」における学習指導の大きな支柱になっていることを、具体的に語り出す論集としての価値が非常に高いと評価できよう。昨今の中等教育の現場では、「論理的思考力」といった課題が掲げられ「評論文」を中心とする学習に偏向する傾向も否めないが、学習者の「思考」を真に活性化するのは、本書に示されるように「文学」を多角的

に読もうとする姿勢なのではないか。教科書採録の「一教材」のみに囚われず、多様なジャンルの作品を縦横無尽に扱って整理・分析する力こそ、現代社会で望まれる情報処理能力なのではないか。それは学習者のみならず、中等教育の指導者が常に「教材研究」を行う上で持たねばならない姿勢に他ならない。「文学研究」こそが最上の「教材研究」であるという立場において、著者は自

己の研究の方向性と所属学部における立場を柔軟に融合した結果、多方面に意義あるこの論集が成立したのと思われる。様々な分野を研究対象とする方々に、ぜひとも御一読いただきたい著である。

(二〇一五年九月 研文出版 A5版 四九〇頁 本体七〇〇円)

新刊紹介

河野貴美子・王勇編

『衝突と融合の東アジア文化史』

本書は、東アジアに関わる文化の「衝突と融合」という視点から、古代から近現代に至る過程で引き起こされたさまざまな「事件」にスポットをあて、文化の形成や構築とはいったいどういうことなのか、改めて問い直してみようという試みのものである。なお、本書は二〇一三年二月二日に早稲田大学において開催したシンポジウム「文化の衝突と融合Ⅱ東アジアの視点から」における基調講演と研究発表を中心としてまとめたものでもある。七つの章に十四の論者が収められて構成され、語や言説、人物の交流史やメディアといった様々な視点から、主に日本・中国・朝鮮における文化の「衝突と融合」が考察されているが、以

下ではその中から二つの論考の概略を簡単に紹介する。

まず、王勇氏の論考を挙げる。これは、「漢籍」という東アジア世界で広く使われてきた漢語の語源について、中国における文脈と日本における文脈の比較から明らかにしつつ、語義の変遷も明らかにしようと試みるものである。日中両国で異なっていたそれぞれの語義が越境し、より広い概念を含んだ「漢籍」という言葉に成長してきたと指摘する王氏の説は、和漢比較を考える上で踏まえておきたいものである。

次に挙げるのは河野貴美子氏の論考である。これは、源為憲撰『世俗諺文』にある漢籍由来の「諺」に注目し、それらが古代日本の文学作品の中で実際どのように用いられていたのかを『源氏物語』古注釈書や歌学書を通してみていくものである。注釈書や幼学書を漢籍の世界との比較の視点をもって考察を進めていくことで、日本の言

葉と文の世界が「漢」文化との「衝突と融合」を経ていかに展開してきたのかをさらに追及していける可能性が示唆されている。これはまた、古典文学の世界のみならず現在に至るまでの日本の言葉と文化の本質を明らかにしていくための一歩でもあるだろう。

国際化やグローバル化、異文化交流の進が盛んに叫ばれる昨今、そこには文化の「衝突」や「摩擦」が生じることは避けられない。日中関係問題の影響を受けながらも学術交流を断ち切ることなく出版され、これまで歴史の中の文化の「衝突と融合」の経験を振り返り、意義を問っていく本書は、これからの東アジア世界の学術研究に携わる人々にとって必読の書であると言える。

(二〇一六年八月 勉誠出版 A4判
一九九頁 本体二〇〇〇円)

〔高 大河〕